

友禅染技法と中国の刺繍技法の融合研究と応用

-中国神話哲学の芸術表現の可能性-

東京藝術大学大学院美術研究科工芸専攻染織分野

学籍番号 1319918

臧傑

要旨

友禅染は日本独自、かつ最も代表的な染色工芸であり、その特徴は精緻で美しく多彩な表現力にあると考える。中国の染色技法には友禅染と同じ技法は存在せず、友禅染の特徴はクリエイターに自由で幅広い表現空間を与えている。友禅染は私の創作ニーズを満足させてくれるだけでなく、既存の他の工芸技法の利用では達成が十分にできず、不可能だった表現の限界を解決し、その精緻で自由な表現力は最大限に芸術的創作のニーズを満たしてくれる。

これと同時に、友禅染の基礎を把握・運用するにあたって、自身の創作の独自性を発展させるため、本友禅の技法を他の技法と組み合わせ運用することで、現代において新たな表現を生み出し、新たな可能性が生まれるであろう。例えば、中国刺繍には独自の美感がある。この刺繍の魅力とは、多彩さと技法が生み出す豊富な階層感や立体感、材料の質感表現や独特の装飾性などがあることであり、これらは時に代替不可能な技法ではないかと考える。友禅染技法の美しく繊細で、自由であり、完成度が高い優れた点が刺繍の技法と組み合わせたり、新たな表現ができることを心から望み、単に二つの技法の美しさを結びつけるのではなく、創作テーマを意識して融合し、独自の技法的言語を作り出すことを目指す。

「民族的なものほどグローバルなものである」という言葉は現在の世界美術界において有用な表現であり、現代の欧米的な風格を有する創作への飽くことのない追求よりも、むしろ根源へ回帰すべきであり、自身がそもそも持つ民族文化と知識を利用することが、東アジアの特色ある伝統的かつ固有の文化を現代工芸の領域まで押し上げると考える。

本論文は友禅染の技法と中国の刺繍技法に対する融合研究と応用を通して、中国神話哲学の芸術表現の可能性を示唆するものである。第一章では、

主に創作の根拠となる神話哲学の観点を述べる。宗教儀礼はおり数千年を経ても各時代の社会生活の構造の中で変わらず維持されるため、既存の宗教儀礼に関する記録から、すでに失われた上古の儀式モデルとそれに相応する神話哲学の観念を推測したり、復元したりすることができることを論じた。第二章では、主に創作過程で用いられた表現技法に焦点を当て、日本の友禅染と中国刺繍から、なぜこの二つの技法によって創作したのかを分析した。本章の中で、まずは日本友禅染と中国刺繍の歴史的発展と主要な特徴をまとめた。つぎに研究の過程で創作した作品に合わせて、この2つの技法のそれぞれの独自性と、それぞれを融合して使用したときに現れた効果を発見し、今後の創作により有効に応用するべく方向性を提示した。第三章では、主に博士学位審査作品について述べた。本章で、まず私の創作構想がいかにより形成され、また創作の中で生み出される主な模様要素とそれが象徴する意味を説明した。次に作品の創作過程に関わる思考のプロセス、作品の展示形態、色彩表現の確立、技法と観念の融合、具体的な制作過程などを紹介した。最後にまとめと今後の展望を述べた。

今回の博士学位審査作品のテーマは「存在の情愫」である。手には世界を変えたり、万物を創造したりする能力がある。それは強さ、包容力、誠実と善徳を代表している。縄は絆と伝承を代表していて、昔から平和と幸福への追求を表現している。人々は進んで縄を神・人・鬼の三分世界の境界線と見なしている。神話に表象される宇宙の法則の全過程は無限に循環し、私心のない献身的な状態である。

「神話を歴史の始まりとして、いかに原初の宇宙観を表現し、人類の心理の方向性を導き作り上げたのか、神話とは本質的に何を表しているのか、文字の制約を受けない歴史とはいったいどのようなものであろうか、有史以前の人類の生存方式は大変恐ろしいものだったのだろうか、未発達で野蛮だったのだろうか、人と自然の関係は本当に進歩したのだろうか…」これらの疑問と再考により、中国神話により深く入りこみ、日本の友禅染と中国刺繍を組み合わせた技法による創作と芸術表現の可能性を提示する。